

「主体的に学ぶことができる児童・生徒の育成」

～自己決定学習を取り入れた個別最適な学びを通して～

- 1 はじめに
- 2 研究の構想
- 3 研究の実践と考察
- 4 成果と課題

第21分科会
カリキュラムづくりと評価

辻花 悠（知教連・卯ノ里小）

カリキュラムづくりと評価 研究の概要報告

1 とりくみ状況

本次の教育研究集会に提出されたレポートは13本であった。内訳は、ICT機器を活用したとりくみが7本、児童生徒が主体的に学べるようにするための工夫についてのとりくみが3本、家庭学習に関するとりくみが1本、プログラミング教育に関するとりくみが1本、活用できる学習内容に関するとりくみが1本であった。

ICT機器を活用したとりくみでは、それぞれの教科の特性や学習場面に応じて有効性を模索する実践や、意見交流の場での有効性を検証する実践を多く見ることができた。体育では自分の運動を録画し客観的に見ることや英語ではボイスメモを活用したスピーキング活動などでのICTの活用が有効であると報告された。また、情報共有アプリを使用することで、学級全員の意見や感想、考えを簡単に集約できるため、多くの意見にふれることができることに加えて、話し合い活動などの別の活動に時間を割くことができることについても報告された。

児童生徒が主体的に学べるようにするために工夫についてのとりくみとして、「個別最適化」や「学習課題の提示の工夫」、「振り返りからの課題発見」という観点での発表があった。児童生徒が自分の力にあったコースを選ぶことや単元や本時の課題でゴールをわかりやすく提示すること、目的や観点を明確にし振り返りを行うことで児童生徒が主体的にとりくもうとする姿が報告された。

家庭学習に関するとりくみでは、自己分析、計画、実行、振り返りというサイクルをつくることで、学習習慣を身に付けさせ、自ら学習にむかおうとする児童生徒を育てる実践が報告された。

プログラミング教育に関するとりくみでは、幼稚園の年長さんをおもてなしするという目的を果たすために、プログラミング教材を使い、必然性をもってプログラミング学習をすすめていくことの重要性について報告された。

活用できる学習内容に関するとりくみでは、国語であつかう古典と日常を結びつける活動を通して、国語学習の有用性を感じたり、想像したり創造したりすることのできる児童生徒を育てる実践が報告された。

2 本次論じられた主な課題

本次では、レポート発表をもとに「主体的に学ぶ子どもたちの姿」という点について話し合われた。ここでは、「～したい」という子どもの気持ちこそが主体的なのではないかという意見や、自分にあった学習を選ぶことができるなどの個別最適化が主体的に学ぶ子どもを育てるのではないかという意見が出た。ただ言われたことを一生懸命やるだけでなく、自分を理解したうえで、自分で選択する力が身につくことも大切ではないかという意見も出された。助言者からは、家に帰って学習内容を自分でやってみようとする姿が主体的な姿ではないかという話があった。

さらに、「わかると感ぜられる授業、楽しいと感ぜられる授業を行う上で大切にしたいこと」についても話し合いが及んだ。授業だけではなく、授業の基盤である学級経営の大切さについての意見交換が行われた。

助言者からは、ICT機器を使う場面や内容を限定し、検証を行い、より具体的なICT機器の有効性についてレポートに反映させたいと助言がなされた。また、主体的に学ぶ子どもの育成をめざすために、授業者の教材に対する理解や授業でつけたい力の明確化など、教員自身が授業に対して主体的にとりくむことを大切にしてほしいと助言がなされた。

(中野靖彦・井上溝太)

報告書のできるまで

第72次教育研究愛知県集会「能力・発達・学習と評価」分科会では、13本のレポートが提出された。レポートからは、タブレット端末などのICT機器の活用により、子どもたちが主体的にとりくんでいる姿がうかがえた。また、個に応じた課題設定や振り返りの工夫などにより、自ら学び、話し合いによって高め合う活動実践が多く報告された。この報告書では、助言者の指導をもとに、「主体的に学ぶことができる児童・生徒の育成～自己決定学習を取り入れた個別最適な学びを通して～」について報告する。

助言者 中野 靖彦（修文大学短期大学部） 井上 溝太（知教連・旭南中）
分科会教研推進委員 宮川 竜一（知教連・大府北中） 東 純矢（知教連・八幡中）
稲垣 拓也（知教連・富貴中） 荒木 健太（名古屋・瀬古小）
野村 惇貴（知教連・名和小） 小橋 美咲（安城・錦町小）

1 主題設定の理由

学習指導要領が改訂され、児童生徒や学校の実態、指導の内容に応じ「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の観点から授業改善をはかることが求められている。また、2019年（令和元年）には、子どもたち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育ICT環境の実現にむけて、GIGAスクール構想が打ち出された。加えて、すべての子どもの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びである「令和の日本型教育」の実現についても言及されている。東浦町では、学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもってねばり強くとりくみ、自己の学習活動を振り返って次につなげることができる「主体的な学び」の観点から授業改善の方向性を探っていくことが「対話的な学び」、「深い学び」の実現に結びつくと考え、2019年度より研究主題を「主体的に学ぶことができる児童・生徒の育成」とし、研究をすすめている。

2021年度の研究では、「主体的に学ぶことができる児童・生徒の育成」をめざし、各校でICT機器を活用した授業実践を行った。課題発見の場でICT機器を活用させることで、それぞれの能力や興味関心に応じた課題を見つけ、意欲的に問題解決にとりくもうという姿がみられた。そうした成果の一方で、新しいタブレット機器による興味や意欲ではなく、学習・教科にむけた興味関心を高めさせる点において課題が残った。

そこで、2022年度の研究では、自己決定学習を取り入れた個別最適な学びの授業実践を行い、「主体的に学ぶことのできる児童・生徒の育成」をめざしていくこととした。

2 研究の構想

(1) めざす児童・生徒像

主体的に学ぶことができる児童・生徒

(2) 研究の仮説

仮説1 子どもが自身の興味・関心や能力に応じて学習方法を決定する場を設定することで、学習意欲を高めたり、ねばり強く学習にとりくんだりすることができるだろう。

仮説2 子どもが自ら学べるような学習環境を整えることで、課題解決にむけて見通

しをもち、一人ひとりの特性に応じた学び方で学習をすすめたり、学習計画を立てたりすることができるだろう。

(3) 研究のてだて

A (仮説1に対して)

- ・向学心をもたせられるような課題を設定する。
- ・子どもが自分で学習方法を決める場面を設定する。

B (仮説2に対して)

- ・物的環境を整える。
- ・人的環境を整える。

(4) 自己決定学習とは

自己決定学習とは、子どもが生まれながらにもっている学ぶ力、学ぼうとする力をいかし、学ぶ内容や学び方を子どもが決めて学習していく方法である。

3 研究の実践と考察

(1) 実践1 小学2年生

① 教科 算数 「かさ」 (6時間完了 本時は第6時)

※啓林館、わくわく算数上、2022年度版

② 学級の実態

本学級の子どもは、学習に対する意欲が高く、特に算数の学習では、素早く課題を終え、どんどん先にすすめたり、できない課題に対して、休み時間も使ってとりくんだりする姿がよくみられる。しかし、個人の能力差が大きいため、やるものがなくなって待たされてしまったり、授業から遅れをとってしまったりする子どもがめだっている。

③ 具体的なてだて

- ・てだてA 課題選択学習を取り入れる。

興味関心・能力によって課題を選択できるように以下の通り4つのコースを設定した。

コース①	教科書の問題や計算ドリル、プリントを使って復習をするコース
コース②	広告の中から、かさが使われているものを見つけるコース
コース③	身の回りの容器のかさを、水を入れて調べるコース
コース④	方眼用紙を使って1Lマスをつくるコース

これらのコースから自分で課題を選択することで、主体的に学習にむかえるのではないかと考えた。また、興味のある課題に対して自分のペースで深く追究できるのではないかと考えた。

- ・てだてB 多様な学びが行えるような環境設定

それぞれのコースでは、子どもたちがさらに意欲的に活動ができるように環境設定を工夫した。コース②では、さまざまな広告やチラシからかさが載っているものを切り取って、協力して大きい順に貼っていく。個別で学習しながらも、協働的な学びを取り入れる、友だちの活動を見たり、友だちと相談したりすることで、自分の活動を調整していったり、学びを深めたりすることができるだろうと考えた。コース③④では、子どもたちが実際に操作できるようにさまざまな容器を用意した。コースの中でも、使いたい

ものを選択するという場面を設定し、主体的に学べるように工夫をした。



【コース③の様子】



【コース④の様子】

④ 授業の様子

前時の段階で、コース選びをしていた子どもたちは、さまざまな教具や具体物が置かれた教室環境を見て、早く活動に入りたそうな様子だった。全体で、かさの基本事項と、本時の流れを確認し、コース別の学習へと移った。

コース①では、集中して復習問題にとりくむ姿がみられた。自分で復習コースを選んでいるため、やらされているという感じではなく、選んだからこそ一生懸命学習にむかえていた。

コース②では、主体的に最後まで活動できていた。前半では、かさではなくグラムなどの他の単位のものも切り取ったり、数字だけ切り取っていたりと活動方法がわかっていない子どもがいたが、友だちに教えてもらったり、教員が声をかけたりすることでしっかりと課題に向き合うことができていた。

コース③と④では、教室を移動して課題にとりくんだ。意欲的に楽しみながら課題にとりくんでいたが、コース②と同様、水を使ったかさの量り方や、1Lマスのつくり方が、子どもだけでは難しい活動があり、教員が声をかける必要がある場面がみられた。また、活動時間が足りなく、最後までやりきれない活動もあった。振り返りの場では、時間が足りなかったこともあり、十分な時間を取ることができなかった。

⑤ 考察

本授業では、児童がいきいきと主体的に活動をしていた点が成果としてあげられる。それぞれの活動のなかで、活動方法は少し上手いかなかった点はあるが、すべての子どもが、他のことに気をとられることなく、自分の課題と向き合い続けていた。授業の終わりには、まだやりたいとその場を離れずに続ける子どももいた。また、広告や、身近な容器を使ったことで、家に帰ってから、買い物をしている時など、今回学んだ「か



【コースの確認をする様子】



【コース②の様子】

さ」の学習と生活がつながるのではないかと考えられた。

一方、課題として教員の見取りという部分で、教員の支援が必要な場面が多々あったように感じた。子ども一人でやり切れる内容の精選や、時間の配分、教員がどの程度支援をしていくのかという点で、今後検討していく必要がある。また、活動に予想以上に時間がかかり、十分な振り返りの時間を確保することができなかった。これらの反省をいかして、他の小学校でも、自己決定学習を取り入れた授業実践を行うこととした。

(2) 実践2 小学3年生

① 教科 理科 「風やゴムの力」 9時間

教育出版、みらいをひらく小学理科3、2022年度版

図工 「ゴムゴムパワー」6時間 ※合科で15時間完了。本時6/15

日本文教、図画工作3・4上、2022年度版

② 学級の実態

本学級の子どもは、授業の活動に対して多くの子どもが意欲的にとりくむことができる。特に理科の学習では観察・実験に主体的にとりくむ子どもは多いが、実験したことを文章でまとめることに苦手意識をもつ子どももいる。日頃の授業では苦手なことに直面するとあきらめてやる気をなくしてしまう子どももいる。

③ 具体的なてだて

- ・てだてA 順序選択学習を取り入れる

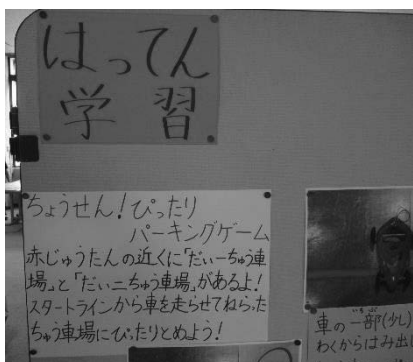
本単元は、理科「風やゴムの力」と図工「ゴムゴムパワー」を組み合わせた合科の単元とした。2つの単元を合わせ、より多くの時間を子どもたちにとることで、子どもの興味関心に応じて、自分で時間の使い方を選択することのできる幅を増やすことにした。そこで、風ゴムコースと、ゴム風コースの2つのコースを設定した。コースの概要は以下の通りである。

コース名	概要	留意事項
風ゴムコース	風のはたらきから先に学習するコース	自分の興味によってコースを選び、学習環境や具体物を利用して子どもが実験しながらゴムや風のはたらきや性質について学習する。
ゴム風コース	ゴムの性質やはたらきから先に学習するコース	

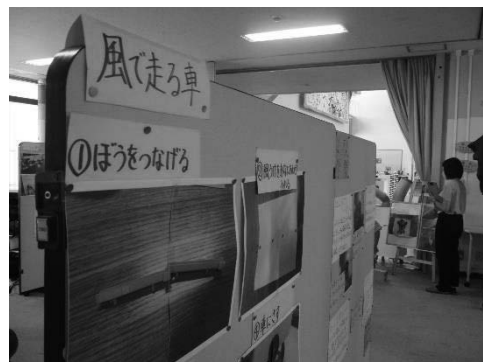
2つのコースから興味に応じて選択することで、主体的に学習にとりくめるのではないかと考えた。

- ・てだてB 多様な学びが行えるような環境設定

1回目の授業同様、子ども自身で活動できるような環境設定をした。オープンスクールという特徴をいかし、授業のときだけでなく常に掲示がされている状態にし、子どもが学校生活の中でいつでも見ることができるようにした。発展学習の内容もいくつか用意し、進度の早い子どもは、学んだことをいかして活動できるようにした。環境設定をさらに工夫したことで、一斉授業では、子どもの実態に違いがあって、遅れをとってしまう子どもを支援してあげる時間をつくったり、すすみの早い子どもが時間をもて余さないようにしたりできるのではないかと考えた。



【多様な学びを支える環境設定①】



【多様な学びを支える環境設定②】



【多様な学びを支える環境設定③】



【多様な学びを支える環境設定④】

・てだてC 子ども自身で学習の計画や、調整ができるような振り返り活動

1回目の授業実践の反省をいかし、子ども自身で活動を振り返ったり、活動時間を調整したりできるような振り返りシートを取り入れた。単元を通した振り返りシートにすることで、見通しをもって学習にとりくむことができると考えた。

④ 授業の様子

授業の開始前から、自分の振り返りを見て今日の活動の確認をしたり、自分のキットを触ったりしている子どもが多く、学習意欲の高まりが感じられた。授業が始まると、教員が軽く流れの確認をした程度で、子どもたちはすぐに活動に移ることができた。見通しをもって、学習できていることがうかがえた。理解に少し苦労する子どもも、同じ進度の子ども様子を参考にすすめることができていた。

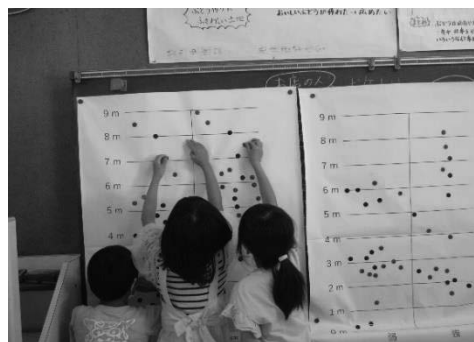


【教員のチェックを受ける様子】

教員の指示なしでも自分たちで活動することができており、教員はプリントのチェックを中心に支援者として授業に参加していた。実験結果に不備のある子どもは、教員からの助言をもらい再度実験をし直したり、友だちに聞いたりして、主体的に学習にとりくむことができていた。教員側が積極的に手助けをするのではなく、学習を見守るという立場をとることで、子どもたちは、自然と協力して実験をしたり、実験結果を比べたり

するなど、ところどころで協働的な学びを行う姿もみられた。

振り返りの時間になれば、今日の自分のすすみを確認し、残り時数と残りの課題とを照らし合わせて、計画を修正する子どもの姿がみられた。授業の終わりには、学習の場の片付けまで子ども自身で行っており、始めから終わりまで、子どもたち主体の授業であった。



【協力して実験結果をまとめる様子】

⑤ 考察

環境設定をさらに工夫したことで、教員の指示や支援がほとんど必要なく、子ども自身で学習にむかうことができていた。教員が全体にむかって話した時間は、最初の確認程度で、支援者として子ども一人ひとりの様子をしっかりと見取ることができていた。正しい実験結果が得られず、普段ならばあきらめてしまうような子どもも、教員からの助言をもらい、ねばり強く実験を繰り返していたことから、学習意欲の高まりが感じられた。同じコース、進度の子どもどうしで、相談したり教え合ったりという協働的な学びもみられた。振り返りの場面では、教員主導ではなく、時間が来れば子ども自身で振り返りの活動に入っており、自分の学習計画を修正することができていた。授業を参観した教員からは、個別で学習をすすめていく中で、協働的に学習をする場面を意図的に設定するのも、学習の深まりを実現するために必要であるという意見もあがった。

4 研究の成果と課題

① 研究の成果

2つの授業実践から、学習内容・方法について子どもに選択させることで主体的に学習にむかえたと言える。また、自分の興味関心、能力に応じて学習方法や内容、時間配分を決めることで、個に応じた学びを行うことができた。一斉授業では、時間をもて余してしまう子どもについては、さまざまな発展学習のコースを設定することで、さらに自分の学びを深めることができていた。環境設定についても、準備の面で多少時間はかかるが、その分、授業中は子どもたちを見取る時間に余裕ができ、普段の学習で困っている子どもに対して、しっかりとサポートすることができていた。

② 研究の課題

個別最適化の学びを取り入れた授業実践をする中で、子どもどうしで学び合う場面が少ないように感じた。令和の日本型教育の中では、個別最適な学びと協働的な学びの一体化について言及されている。今回の授業実践では、子どもの主体性を引き出すことに成果を感じられた一方、そこから子どもそれぞれの学びがどれだけ深まったかについて課題を感じた。また、学習につまずいている子どもに対しても、協働的な学びを効果的に取り入れ、教え合ったり支え合ったりすることで、子どものフォロワーシップも育まれるのではないかと考える。個別最適な学びの中で、教員側が意図的に協働的に学ぶ場面を設定することで、主体的で対話的な学びを通した深い学びに到達できるように考えていく必要がある。